

せっしゅうがっぽうがっじ

摂州合邦辻

〔解説〕

安永二年（一七三三）北堀江座初演。菅専助（すがせんすけ）、若竹笛（わかたけふみえ）の合作。謡曲の「弱法師」（よろぼし）、説教節及び古浄瑠璃の「しんとく丸」などの説話を主材にし、継母が継子に恋をするという「愛護若」（あいごのわか）の筋を加えました。戯曲では玉手の恋は偽りという事になっていますが、近代的解釈では、継母といってもまだ若い（十九か二十）玉手が、俊徳丸の体内に自分の血を入れることによって、恋を成就させるという、屈折した心理表現とされています。

〔あらすじ〕

合邦は大阪天王寺西門の近くに住む坊主。娘のお辻は、高安通俊という公卿に仕えていましたが、奥方の死後、後妻となり玉手御前と呼ばれています。通俊には、妾の子次郎丸と先妻の子俊徳丸がおり、二人とも玉手にとっては継子です。次郎丸は年長でしたが、正妻の子でないため、跡継ぎになれず、それを怨んで俊徳丸暗殺を企てます。そんな中、玉手は俊徳丸に恋心を打ち明けるのですが、拒絶されてしまいます。叶わぬ恋を怨んだ玉手は俊徳丸に毒をもち、病氣にかからせてしまいます。

病のため目も見えず醜い姿となってしまうた俊徳丸は、家出をして天王寺近くの小屋にいます。そこへ許嫁の浅香姫が尋ねてきますが、次郎丸一味に襲われかけ、合邦に救われます。二人はその庵室に身を寄せることになりました。

〈合邦庵室の段〉

合邦の元へ玉手がやってきます、妻の説得もあり、娘を家に入れ、俊徳丸の事はあきらめるように言い聞かせるのですが、玉手は承知しません。様子をきいていた俊徳丸と浅香姫は逃げようとしませんが、それに気づいた玉手は、嫉妬に狂って襲いかかります。たまりかねた合邦は娘を刺してしまいます。

苦しい息の中で本心を打ち明ける玉手。実は俊徳丸に心にもない恋を仕掛けたのは、次郎丸一味から難を逃れさせるため、自分の生き血を飲ませると俊徳丸の病が治る事を告白するのです。事実を知った合邦たちは嘆き悲しみます。玉手の血を飲んだ俊徳丸は元の姿にもどり、玉手は静かに息を引き取ります。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

合邦庵室の段

しんたる夜の道、恋の道には暗からねども、気は
鳥羽玉の玉手御前、俊徳丸の御行方、尋ねかねつゝ
人目をも、忍びかねたる頬かむり包み隠せし親里も
今は心の頼みにて馴れし故郷の門の口、立寄る跡よ
り入平が、ご両所の御行方こゝとは聞けど奥方の、
姿見るより様子もと、戸脇に厚き藪畳、身をひそめ
てぞ窺ひある。かくとは知らず玉手御前、干割ひわれに洩
るゝ細き声、

「母様／＼」

と呼ぶは確かに娘の声、

「ヤアわりやまだ死なぬか、殺さりやせぬか」

と、立上りしが心付き、振り返り見る女房の方、鉦

に紛れて聞えぬは、『これ幸ひ』とそ知らぬ顔、

「母様／＼こゝ明けて」

と、叩く戸の音聞き咎め

「合邦殿、今こな様は何とぞ云うてか」

「ア、イ、ヤ何とも云やせぬ、そりや空耳であるぞ
いの」

「イヤ空耳かは知らねども、ちらりと聞えた娘が声、
ハテ合点のいかぬ」

と立上る、

「さうおつしやるは母様か、ちやつと明けて下さん
せ、辻でござんす戻りました」

と、聞いてびつくり、

「ヤア戻ったとは夢ではないか、健まめであつたか嬉し

や」

と、駈出る裾を取つて引止め

「ヤイくくく、うろたへ者、肌は触れても触れいでも、わが子に不義をしかけた畜生、侍の身で高安殿が、助け置かしやる様なければ、何の今まで存ながらへ

て、うかくくこくへ何しに來うぞい、隠すより顯はるゝはなし、親はないと云はしても、ある事知つて、

娘が手から度々の合力金、二人が命を養ふたは、じうりよくきん

みな高安殿のご厚恩、サ、サ、その夫の目を掠め、

畜生の心さげた娘、たとへ無事で戻つたとて、門端

も踏まされうか、もとより娘は斬られて死んだ、が

今もの云うたが娘なりや、それこそ幽霊、そなた気

味が悪うはないか、肉縁の深いほど死人になれば怖

いもの、必ず門の戸明けまいぞ」

と、云ふに女房は、

「イヤくくく、幽霊はおろか狐狸の化けたのでも、

ま一度見たい娘が顔、もしや恐しいものであつて、

目を廻して死んだら仕合せ、いとし可愛い子を先立て、生きて業をさらさうより、一目見たい」

と振り切るをなほ引止めて

「ハテさてマ悪い合点、狐狸か幽霊なればまだしも、もし誠の娘なら、高安殿へ義理の云訳、以前は刀を差いた役、親の手にかけ殺さにやならぬ、サ、サ、それが嫌さに止めるのぢや」

と、泣かねど親の慈悲心を、聞く子や妻はうちと外、

顔と顔とは隔たれど、心の隔て泣き寄りの、親身の

誠ぞ哀れなる、娘は涙押拭ひ、門の戸口に口を寄せ、

「父様のお腹立ち、お憎しみはご尤も、これにはだ

んく云訳あれど人目を忍ぶこの身の上、マアこゝ

明けて下さんせ」

と、泣くく願へば母親は、

「アレ聞いてか合邦殿、云訳があるといひの、マ、

マ、マア聞いてやつて下さんせ、ハテ娘と思へば義理も欠ける、が幽霊をうちへ入れるに、誰に遠慮もあるまいぞえ」

「ム、いかさまなうこの世を離れた者なれば世間を憚ることもないかい、そんなら早う呼び込んで、茶漬でも手向けてやりや、ア、可哀や立寄るところはなし、幽霊もさぞひだるかる」

と、身を背けるは泣く百倍、母は悦び門口の疾しや遅しと開く間も、

「お懷しや」

「懷しや」

と、縋る娘の顔形、前うしろ見つ肌に手を、入れてもやつぱりほんの娘、

「嬉しや健でゐたかいの、さうとは知らいで逆様事、あた忌々しい百萬遍、弔ひした夜に無事な顔、ひよ

つと夢ではあるまいか」

と、抱きしめ／＼嬉し泣き、父もほど経る娘が顔、見たさに思はず立寄れど、以前の詞と世の義理を、思へばちやつと飛び退いて、手持ち悪ぞいぢらしき。母はやう／＼心を沈め、

「世間の噂にはの、そなたはアノ俊徳様とやらに恋をして、館を抜けて出やつたのイヤ不義ぢやのと悪う云へど、そなたに限りよもや／＼さう云ふことはあるまいの、コリヤアノ嘘である嘘である、オホ、／＼、ヲ、嘘か／＼」

と箸持つてくゝめるやうな母の慈悲、面映ゆげなる玉手御前、

「母様のお詞なれどいかなる過去の因縁やら、俊徳様の御事は寝た間も忘れず恋ひ焦れ、思ひ余って打ちつけに、云うても親子の道を立て、つれない返事

堅いほどなほいやまさる恋の淵、いつそ沈まばどこまでもと、後を慕うて歩はだし、^{から}芦の浦々難波渦、身を尽くしたる心根を、不憫と思うてともく、俊徳様の行方を尋ね、女夫にして下さんすが、親のお慈悲」

と手を合はせ、拝み廻れば母親も、今さら呆れわが子の顔、ただ打守るばかりなり、父はとかうの詞なく、納戸のうちより昔の一腰引さげ出で、

「ヤイ畜生め、おのれにはまだ話さねど、もとおれが親は青砥左衛門藤綱というてナ、鎌倉の最明寺時頼公の見出しに合うて天下の政道を預り、武士の鑑と云はれた人ぢやわい、おれが代になつても親の蔭、大名の数にも入つたれど、今の相模入道殿の世になつて、佞人どもに讒言しられ、浪人して二十余年、世を見限つての捨て坊主、この形になつてもナ、

親の譲りの廉直を立て通した合邦が子に、マようもく、おのれがやうな女子の道も、人の道も、むちやくちやな娘を持ったと思へば、無念で身節がエイ砕けるわい、ガまた高安殿が今日まで、うぬを助けて置かつしやるご心底を推量するに、もとおのれは先奥方の腰元、後の奥方に引上げうとあつた時、たつて辞退しをつたを、心の正直懇望で無理やりに奥方^{なり}姿、ア、手をかけず奥様とも云はさずば、今この仕儀にも及ぶまい、殺さにやならぬやうになつたも、みなわが業とお身の上を省みて、親への義理に助けさつしやるを、ア、ありがたい、恥づかしいと思ふ心が芥子ほどでもあるなら、譬へどれほど惚れておつても、思ひ切るに切られぬといふ事はないわい、それに何ぢや、そのざまになつても、まだ俊徳様と女夫になりたい、親の慈悲に尋ねてくれとは、

ドゞゞゞどの頬げたで吐かした、エゞあつちから
義理立てゝ助けて置かしやるほど、生けて置いては
こつちもまた義理が立たぬ、サ覚悟せい、ぶち放す」
と、はや抜きかくる刀の鯉口、母は取り付き、

「コレ合邦殿、ソリヤ了簡が違うた／＼、お慈悲で
助けて下さる娘、お志を無足にして、殺して義理が
立ちますか、ハテこの上は随分と意見して、俊徳様
の事思ひ切らし、命の替りに尼法師、いかなる科の
囚人も助かるは衣の徳、浮世を捨つれば死んでも同
然、どこへの義理も立つ道理」

と、奥へ指差しさま／＼となだめすかして母親は、
わが子の膝に膝すり寄せ、

「モ聞きやる通りの様子なれば、どのやうに思やつ
ても、そなたの恋は叶はぬほどにの、ふつつりと思
ひ諦めて、はやう尼になつても、十九や二十の年

輩で、器量發明優れた娘、尼になれと勧めるは、マ
どんな心であるぞいの、コレ助けたいばかりに花
の盛りを捨てさせて、かゝれとてしも黒髪の、百筋
千筋と撫でしもの、剃らねばならぬこの仕儀は、何
の因果」

とばかりにて縋り付いて、泣きゐたる、娘は飛び退
き顔色変へ、

「エゝわつけない事云はしやんすな、わしや尼にな
ること嫌ぢや／＼、アイ嫌でござんす、モせつかく
艶よう梳き込んだこの髪が、どう酷たらしう剃られ
るもの、今までの屋敷風はもう置いて、これからは
色町風随分派手に身を持つて、俊徳様に逢うたらば、
あつちからも惚れて貰ふ氣、怪我にも仮りにも尼の、
坊主のと云ひ出しても下さんすな」

とけんもほろろに寄せ付けず、

「さう吐かしやモウ勘忍が」

と、父が身構へ母親は、

「ヲ、道理でござんす、腹の立つは尤ぢや／＼、ガ
モウ半時かしいて一時、わしに預けて下さんせ、手
の裏を返すやうに、思ひ切らして見せませう、夫婦
になつて長の年月、たった一度のわしが願ひ、コレ
聞き届けて下され」

と願へば、是非も、なかの間へ、見返りもせずに行
く父親、母は意地張る娘の手、引立て／＼無理やり
に納戸へ